

都市住民による中山間地域への継続的支援組織の形成プロセス

京都府「ふるさとボランティア」を事例として

誌名	農村計画学会誌 = Journal of Rural Planning Association
ISSN	09129731
著者名	藤木, 庄五郎 星野, 敏 中村, 省吾 橋本, 禅 九鬼, 康彰
発行元	農村計画学会
巻/号	31巻
巻号補足	論文特集号
掲載ページ	p. 285-290
発行年月	2012年11月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



都市住民による中山間地域への継続的支援組織の形成プロセス

—京都府「ふるさとボランティア」を事例として—

Formation process of continuing support system for Intermediate and Mountainous Area by the city dweller

・Focusing on the volunteer activity “Furusato Volunteer” in Kyoto Prefecture・

藤木庄五郎* 星野敏** 中村省吾* 橋本禪** 九鬼康彰**

Shogoro FUJIKI* Satoshi HOSHINO** Shogo NAKAMURA** Shizuka HASHIMOTO** Yasuaki KUKI**

(*京都大学大学院農学研究科 **京都大学大学院地球環境学学)

(*Graduate School of Agriculture, Kyoto University **Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University)

I はじめに

現在、過疎化の進む中山間地域の農村では農地や土地改良施設の健全な維持管理が極めて難しくなっている。特に深刻なのは人手不足であり、地域外、特に都市住民による支援が重要な意味を持つようになってきた。また定住者を増やさなければ近い将来、存続そのものが不可能になる地域も数多く存在しており、都市人口を呼び込み、定住者を増やすと言った意味からも都市農村交流を活発に行なうことが必要である。それらの課題への取り組みとして、都市住民による農村支援ボランティア活動が実施されている地域が数多く存在する。農村支援ボランティアを実施するにあたり、特に初期段階では行政による活動資金の援助や運営面、事務機能のサポートが必要である¹⁾。しかし、予算制約、人員不足等の課題があり、行政主導のボランティア活動を恒常的に行なうことは困難である。支援を持続させるためには、行政から市民へとボランティアの実施主体を移行させる必要があるが²⁾ その様な移行がどのように生じうるか、また支援の継続性はどのように確保されるか、まだ十分に明らかにされていない。そこで本研究では(1)行政主体で行われている農村支援ボランティアをきっかけとして、都市住民が自主的に農村を支援するに至る過程を、ボランティア参加者の意識の変化に焦点を当てて解明すると共に、(2)行政の支援を離れた自主的な農村支援の継続性について主体間関係の変化に焦点を当てて検討する。

II 研究の対象と方法

1 研究の対象

本研究では、京都府が実施する農村支援ボランティア「ふるさとボランティア(略称「さとボラ」)」を対象と

した。さとボラは平成14年から現在まで継続されている事業であり、京都府の広域振興局単位でボランティアとしての都市住民を受け入れる地域(団体)を定め、広報、PR、窓口業務、運営への助言、交通手段(無料送迎バス)などの支援を行なうものである。これまでの実施地区数は23地区あり、本事業をきっかけに舞鶴市N谷地区と綾部市睦寄町K屋地区の2地区でのみ、都市住民が行政を介さずに農村支援の活動を行なう「自主応援組織」が発足している。1度きりでさとボラの受け入れを打ち切る地区も多い中で、この2地区は平成22年までに10回以上のさとボラを実施するに至った経緯もあり(表1)、さとボラの中でも特に際立った成功を収めている地域である。

N谷地区は「ゆずの里構想」をもとに地域活性化に取り組んでおり、本構想の実現に向け平成18年からさとボラを受け入れ、ゆずの植栽などの活動を行なった。6回目のさとボラを終えた平成20年に自主応援組織「we love N谷!」(会員数28名)が発足するも、都市住民と地元の情報伝達の滞り、予算の不足などの理由により、現在では自主応援組織は概ね活動を休止した状態になっている。K屋地区は、以前から「栃の実」を用いての地域活性化に取り組んできた地区であり、平成20年からさとボラを受け入れ、栃の実の商品化に向けた活動を行なった。本地区で12回目のさとボラを終えた平成23年に自主応援組織「K屋でがんばろう会」(会員数18名)が発足、現在でも活発に自主応援活動を行なっている。

表1 平成23年までのさとボラ実施状況

Table1 Implementation status of “Satobora” until Heisei 23

実施地区	実施回数	参加人数
N谷	11回	325人
K屋	12回	205人
全地区平均(N谷、K屋除く)	2回	40人

表2 参加者の意識と自主応援組織誕生に関わる主なヒアリング結果

Table2 Main results of an interview research about the consciousness of volunteers and formation process of citizen's volunteer organization

	N 谷地区			K 屋地区		
	行政担当者 (H 氏)	地元住民 (M 氏)	都市参加者 (H 氏)	行政担当者 (N 氏)	地元住民 (W 氏)	都市参加者 (A 氏)
さとボラ参加初期	毎回の作業が大きな構想の目的のためにあるのが分かりやすかったことが参加者の達成感を増加させた。結果、多くの参加者がリピーターになった (a)。また、参加者の気持ちを N 谷地区につなぐために「N 谷通信」を定期的に送るなどの工夫をした (b)。	N 谷地区は住民が友好的で外から人が来やすい気質、風土があり、さとボラを受け入れやすかった。	地元が喜んでくれて達成感があり、作業がハードでなく楽しく、作業自体に達成感もあるため N 谷地区はリピーターが多い (a)。また 1 度行くと行政から連絡が来るようになり参加しやすくなった (b)。	満足感が都市住民の継続的参加につながり (a)、地元の人との交流が満足感に影響を与えている。K 屋地区では地元住民も最初は恥ずかしがっていたが、頑張って参加者と交流しようとしたのが良かった。	最初はみんな恥ずかしがって参加者に話しかけられなかったが、頑張って交流の機会を増やすようにした。また、行政の担当のサポートがなければさとボラは続けられなかっただろう (c)。	最初は挨拶をするくらい関係だったが、徐々に一緒に集落の人と考えたり話し合ったりできるようになってきた。
複数回参加後	さとボラを繰り返すうちに地元住民と参加者同士の付き合いが親密になり (d)、さとボラ参加者が行政を通さず地元と交流を始めた。さとボラに来ることで地域への愛着 (e) や個人的に集落を訪れやすい人間関係ができたようだ (d)。	本当に N 谷地区を何とかしたいというメンバーがたくさんいた。	木を植える作業は地域への愛着が湧きやすく (e)、何度も参加することで地域への思い入れができた。開催回数が多かったこともあり、参加者同士でつながりができ、行き帰りのバスも知り合いばかりだった。地元住民とも仲良くなり、他の地域より N 谷地区に居入れしていた (d)。	さとボラの活動を通して参加者の輪ができ始め (d)、コアメンバーが固まり、回数を重ねるうちにいい雰囲気づくりができてきた。	A 氏とは何回も集落に訪れていくうちにさとボラとは関係なくお付き合いができるようになり、個人的に話し合ったりもするようになった (d)。	個人的に地元住民と知り合いになり、地元仲間として受け入れてもらえたように感じた (d)。地元の人の何とかなしいといけないう気持ちや不安感が満ちたような雰囲気を感じ、自身も地域消失の危機を感じた。
自主応援組織誕生過程	平成 20 年から中山間ふるさと保全委員会の企画公募があり、N 谷地区を応援する会を正式に作り応募することになった。このままでは行き詰りますよと関係者に危機感を煽り、雰囲気を作った。あまり早く切り出すと受け入れてもらえないのである程度雰囲気が整ってから話をもちかけた (g)。	府からの補助金が平成 20 年ではなく、補助金の受け取り先を自主応援組織にすることで新たに補助金を得ることになった。	さとボラ以外にも地元のためにできることがあるのではないかと感じ、また、さとボラの回数の少なさに不満を感じ始めた (f)。しかし、個人的に N 谷地区を支援する活動をしたが連絡をするツールがなかった。自主応援組織をつくることが決まった際にはすぐに参加を決めた。参加者達の気持ちと行政の思惑が一致したと感じた。	ボランティア参加者の雰囲気を確認しながら自主応援組織の話を進めていった (g)。押しつけを避け、自主的にやってもらえるように心がけ、都市参加者 A 氏に自主応援組織の代表になってくれるようお願いをした。	いつまでも京都府の行政ばかりに頼っているわけにはいかないと感じていた。	さとボラに参加している中で、このままでは良くない、さとボラしても地元の負担が増えるばかりなのではないかと危機感を持ち始めた (f)。そしてもっと貢献できる場が欲しいと考え始めた。そんな中、行政 N 氏に自主応援組織の代表をしてくれないかと誘われ、快諾した。

2 研究の方法・枠組み

(1) 自主応援組織の形成メカニズムの実証

本研究では、自主応援組織設立に至るまでの過程に関する仮説を得るため、平成 23 年 8 月にさとボラを実施している 7 地区でヒアリングを行なった (尚、同年 12 月、翌年 1 月にも追加ヒアリングを実施)。特に N 谷地区、K 屋地区の 2 地区で中心的役割を担う関係者 (行政担当者、地元住民、都市参加者各 1 名) に行なったヒアリング結果を表 2 に示す。ここから、さとボラ参加者の意識について以下のような仮説を設けた。(仮説 A) : 参加初期の参加者はさとボラから得られた満足感や達成感を動機に再び参加するようになる^{注 1)}。(仮説 B) : 都市住民がさとボラに複数回参加していく中で、特定の地域への愛着や、人とのつながりが形成されていく。その愛着やつながりが一過性の満足感とは別の動機となり、継続的にさとボラに参加する契機となる。(仮説 C) : その気持ちが更に発展し、さとボラ以外でも地域と交流を持つとするとする気持ちが生まれる。この気持ちが自主応援組織の形成へと発展する。

本研究では、これらの仮説を検証するため、平成 23 年 9 月上旬に全 23 地区のさとボラ参加者 342 名に対して郵送によりアンケート調査を実施し (表 3)、分析を

表3 分析に用いたアンケート項目

Table3 Questionnaires used for analysis

質問項目	選択肢
さとボラの活動に参加してあなたはどの程度満足されていますか	大変満足した あまり満足していない 満足した 全く満足していない どちらでもない
今後もさとボラに参加していきたいと思いますか	ぜひ続けて参加したい 都合が合えば参加してよい 分からない たぶん参加しない
さとボラの活動における地元との交流にどの程度満足されましたか	大変満足した あまり満足していない 満足した 全く満足していない どちらでもない
あなたがこれまでに参加したさとボラの延べ活動参加回数をお答えください	自由記述
さとボラ当日の地域住民との交流はどうでしたか	活発な交流があった ある程度交流があった そこまで交流はなかった まったく交流はなかった
さとボラ当日の参加者同士の交流はどうでしたか	活発な交流があった ある程度交流があった そこまで交流はなかった まったく交流はなかった
もし送迎バスがなかった場合、あなたはさとボラに参加したと思いますか	バスに関わりなく参加した 参加を迷った たぶん参加しなかった
さとボラに参加された後、あなたが関わった作業の結果がどのようになっているのかについて関心はありますか	非常に関心がある それなりに関心がある どちらでもない あまり関心はない
あなたは自主応援組織に興味がありますか	興味がある 興味はない
あなたは自主応援組織に参加していますか	参加している 参加していない

行なった。回収数は 134 部（回収率 39%）であり、母集団に対する標本が小さく、統計的に精度の高い調査とは言えないため、アンケート調査を補完する情報として、表 2 に示すヒアリングの結果を用いた。そのため、表 1 中には、後に分析に用いる情報に下線を引いている。

（2）自主応援組織の継続性に関する検討

自主応援組織の継続性に関して検討するため、継続性に問題を抱えていた N 谷地区と継続に成功している K 屋地区のそれぞれの関係主体を行政、地元住民、都市住民に分け、その関係に着目し、さとボラ開始から自主応援組織設立までの変化を、ヒアリング調査（対象者は（1）と同様）から明らかにする。その違いを比較分析することで継続的に自主応援組織を維持する要因を検討する。

III 自主応援組織の形成メカニズムの実証

1 さとボラ参加者が再び参加する要因（仮説 A）

図 1（i）は「さとボラの活動への満足度」と「今後も参加したいか」の関係を示したものである。「大変満足した」「満足した」「どちらでもない」と満足度が下るにつれてさとボラへの参加意思も低くなるのが分かる。よって、満足度が高いほどさとボラへの参加意思も強くなると言える。ただし、「どちらでもない」「あまり満足していない」を選んだ回答者も参加意思をもつことから、満足度以外にも参加意思を左右する要素があると言える。

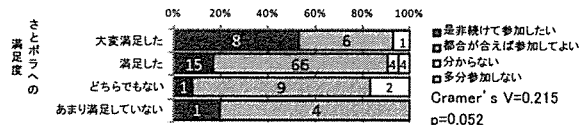
（ii）は「地元との交流の満足度」と「さとボラの活動への満足度」の関係を示したものである。 $p < 0.01$ と有意な関係を示しており、地元との交流に満足しているほどさとボラの満足度も上がる傾向にある。

ヒアリング結果（a）と、以上のアンケート分析より、さとボラに繰り返し参加する要因の一つは、さとボラから得られた満足感や達成感であることが分かる。つまり、さとボラに参加した都市住民がボランティア活動により満足感や達成感を得て、その感情が再びさとボラに参加する動機となる。また、その際、満足感を得るための要因の一つは地域の人との交流であることが分かる。また、ヒアリング結果（b）より都市住民が参加を決める際、行政からの案内が役に立つこと、ヒアリング結果（c）よりさとボラ初期では継続してさとボラを開催するために行政のサポートが有効なことが言える。

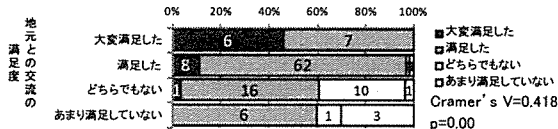
2 さとボラに参加する中で起こる変化（仮説 B）

（iii）は「参加回数」と「地域住民との交流の程度」の関係を示したものである。統計的な有意差はないものの、参加回数が多いほど地域住民との交流は増える傾向が見られる。つまり、参加回数が多いほど地域住民との

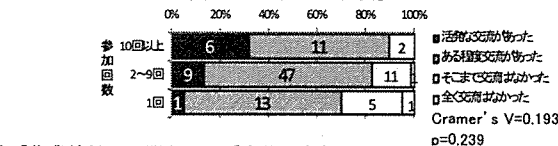
（i）「さとボラへの満足度」×「今後も参加したいか」



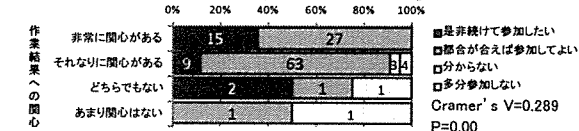
（ii）「地元との交流の満足度」×「さとボラへの満足度」



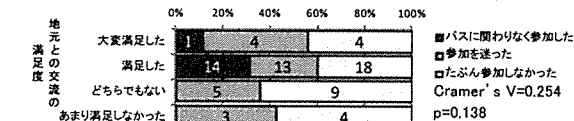
（iii）「参加回数」×「地域住民との交流の程度」



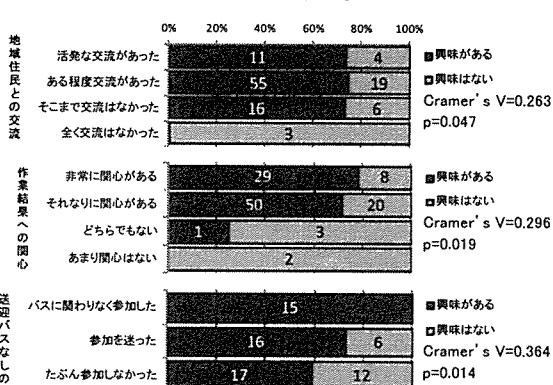
（iv）「作業結果への関心」×「今後も参加したいか」



（v）「地元との交流の満足度」×「送迎バスなしの参加意向」



（vi）「地域住民との交流」、「作業結果への関心」、「送迎バスなしの参加意向」×「自主応援組織への興味」



（vii）「自主応援組織に参加しているか」×「作業結果への関心」、「地元との交流への満足度」、「地域住民との交流」

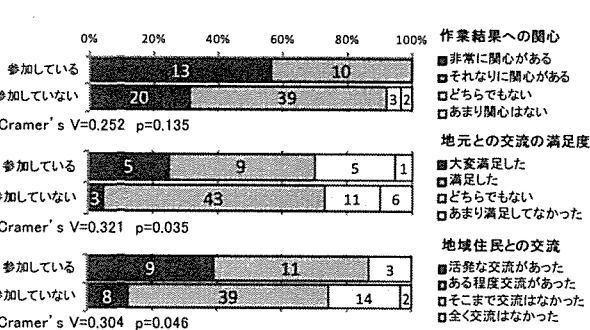


図 1 アンケート結果クロス集計

Fig.1 Cross table of the questionnaire results

注：回答者が 0 の項目は省略して集計している

つながりが強くなると言える。(iv)は「作業結果への関心はあるか」と「今後も参加したいか」の関係を示したものである。 $p<0.01$ であり、有意な関係が見られることから、作業結果への関心が高いほど今後さとボラに参加する意思が強くなることが分かる。ここで、ヒアリング結果より「木を植える作業は地域への愛着が沸きやすい」とあり、作業への関心は地域への愛着と強い関係があると考えられるため、地域への愛着が強いほどさとボラに参加する意思が強くなると言える。

ヒアリング結果(d)、(e)と以上のアンケート分析より、さとボラに複数回参加していく中で、作業結果への関心(=地域への愛着)や地域住民及びさとボラ参加者同士でのつながりが強くなっていき、そうした人とのつながりや地域への愛着が一過性の満足感とは別の動機となり、その後継続的にさとボラに参加する要因となると考えられる。このことは(i)において満足度だけでは参加意思の説明がつかなかったことが裏付けている。

3 自主応援組織への発展(仮説C)

(v)は「地元との交流への満足度」と「送迎バスがない場合の参加意向」の関係を示したものである。統計的な有意差はないものの、地元との交流に満足している人ほど(=地元住民と良好な関係を築けている人ほど)送迎バスがなくてもさとボラに参加する意思が強くなる傾向がみられる。同様に「送迎バスがない場合の参加意向」と「地域住民との交流の程度」、「参加者同士の交流の程度」、「作業結果への関心」の関係を見たところ、全項目で同様に正の相関が確認された。さとボラ最大のメリットである無料送迎バスがない場合でも参加しようと感じるのは、自主的に地域を支援したいという気持ちの表れであると考えられることから、地元住民や参加者同士のつながりや地域への愛着が強い人ほど自主的に地域を支援したいと感じると言える。(vi)は「自主応援組織への関心」と「地域住民との交流」、「作業結果への関心」、「送迎バスがない場合の参加意向」の関係を示したものである。全て $P<0.05$ と有意な関係を示しており、地元住民とのつながりや地域への愛着が強い人ほど、そして、送迎バスがなくてもさとボラに参加する意志が強い人ほど自主応援組織に興味を持っていることが分かる。(vii)は「自主応援組織に参加しているか」と「作業結果への関心」、「地元との交流への満足度」、「地域住民との交流」の関係を示したものである。全て自主応援組織に参加している人の方が良い結果が出ていることから、自主応援組織に参加している人の方が、地域への愛着が強く、地元住民とのつながりが強いことが分かる。

ヒアリング結果(f)、(g)と以上の分析より、さとボ

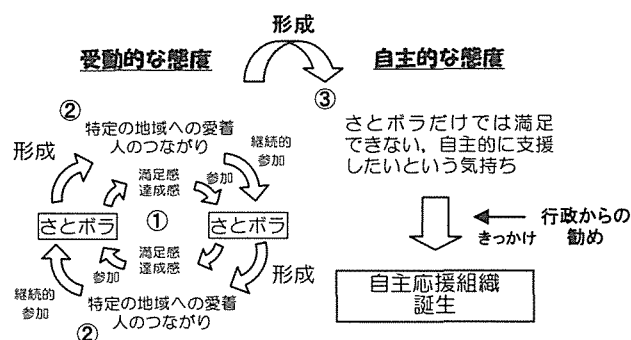


図2 自主応援組織ができるまでの過程まとめ

Fig.2 Formation process of citizen's volunteer organization

注：①～③は形成される順番を表す

ラに参加していく中で形成される人とのつながりや地域への愛着が強くなると、さとボラにおけるいわば与えられたボランティア活動、言い換えると受動的な活動だけでは満足できない気持ちが生まれる。そして、さとボラとは関係なく地域を支援したいという自主的な態度が生まれる。こうして生まれた気持ちが自主応援組織誕生の動機となり、行政からのきかけをきっかけにして自主応援組織が形作られることが分かる(図2)。

IV 自主応援組織の継続性に関する検討

1. さとボラ実施中の主体間関係

さとボラ開始から、さとボラ活動中にかけて、N谷、K屋ともに大きな違いは見られない(表4)。

2. 自主応援組織の誕生における行政の役割

行政担当者が都市住民に自主応援組織を提案し、並行して組織の代表となる人物に声をかけるという展開は両地区で同じだが、N谷地区の自主応援組織は、会則、会費がなく、参加者への負担がほぼないが、K屋地区の自主応援組織では会則、年会費(1000円)があり、参加者への負担が若干ある。この違いは先行事例だったN谷地区での資金不足や会員登録のあいまいさの失敗をもとに、同じ失敗を回避するためK屋地区の行政担当N氏が取り組んだ結果である。ここから、自主応援組織誕生時における活動資金獲得のための仕組みの導入の有無が自主応援組織の継続性に影響を与える可能性が示唆される。

3. 自主応援組織活動初期における、行政から自主応援組織への機能の移行

自主応援組織活動初期において、K屋地区では情報発信機能の移行が進んだのに対してN谷地区では進まなかった。N谷地区においてM氏への機能の移行が進まな

かった理由は、M氏は自主応援組織について「補助金を得るためにさとボラの実施主体の名前を変えただけ」という認識が強く、自主応援組織をさとボラの延長として見ていること、行政から情報発信のノウハウ（チラシ作成など）の移行がなかったこと、などが考えられる。逆に、K屋地区のA氏に役割の移行が進んだ理由は、A氏には「自主応援組織はさとボラでできない活動をするためのもの」という意識が強く、行政に依存しない活動を心がけていたこと、また、A氏自身が大学教員ということもあり、資料作成などのノウハウを持っていること、が考えられる。このように、自主応援組織の代表となる人物の意識の違いやノウハウの有無が機能の移行に影響を持つと考えられる。

4. 自主応援組織活動の現在

N谷地区で「we love N谷」が地元と都市の仲介機能を果たせずにいる理由は、ノウハウの不足の他にM氏には「参加者はゆずの実ができるのを楽しみに来ている、ゆずの実ができない今のままではメンバーが集まる口実がない」という認識があり、都市住民にボランティアに来てもらうことに対して引け目を感じている面があること、また、N谷地区では現在ボランティアに充てる予算が全くなく、都市住民に金銭的負担を課してしまうことに対して気を遣っているということが考えられる。一方、K屋地区におけるA氏の場合は、支援される側ではなく、支援する側の立場にいたることから、その様な気遣いをする必要はなく、情報の発信をしやすと考えられる。このように、自主応援組織の実施主体が都市か地元か、という違いも継続性に影響を持つ可能性が示唆される。

V 考察

本研究では、さとボラにおいて自主応援組織が形成する過程に起こる参加者の意識の変化とその要因が明らかになり、また、自主応援組織を継続させる要因の示唆が得られた。本研究は今後、都市住民による農村支援ボランティアを設計、実施する上で重要な意味を持つと言える。以下にその内容を整理する。

本研究で分析した過程は時系列順に大きく4段階に分類される。(1)参加者がさとボラに参加し始めた時期、(2)参加者が特定の地域への参加を繰り返した後、(3)自主応援組織の誕生過程、(4)自主応援組織の誕生後。これらの過程で適切な対応が行なわれることでボランティアの主体が行政から市民へと移行される。

(1)の時期では、参加者は毎回のボランティア活動から得られる満足感・達成感を動機に再参加を決める。この時期に大切なことは、参加者に満足感や達成感を得

表4 対象地区の現在までの主体間関係の変化まとめ
Table4 Changes of relationship in object areas until now

	N 谷地区	K 屋地区
さとボラ開始	行政担当が地元住民と連携し、都市住民に情報を発信するという形態でさとボラは始まった。	
さとボラ活動中	行政担当のH氏は、都市から移住してきたM氏に、地域の代表として機能してもらうため、意識的にさとボラでの仕事を振るなどの育成に取りかかった。	さとボラに参加する都市住民の中でも特にA氏がK屋地区区長のW氏と親交を深め、K屋地区住民に受け入れられていった。
自主応援組織誕生	行政担当のH氏は、徐々に自主応援組織の話を勧め、M氏を自主応援組織のN谷地区の代表、H氏自身を都市側の代表として自主応援組織の活動を開始。	行政担当のN氏は都市住民を自主応援組織に誘導していった。また、自主応援組織の代表をA氏にお願いし、自主応援組織の活動を開始。
自主応援組織活動初期	ボランティアの情報発信の役割をM氏に移行することができず、結果、行政のH氏が都市住民と地元との仲介役をすることになり、結局さとボラと組織の形態が同じになってしまった。活動自体も自主応援組織主催という名目ではあるが実質さとボラとなら変わらないものになってしまった。	ボランティアの情報発信の役割をA氏にスムーズに移すことができ、結果、地元住民と都市住民との仲介役をA氏が担うこととなった。これにより、活動自体もさとボラと自主応援組織独自の活動とが区別分けられた状態でおこなわれるようになった。
自主応援組織活動の現在	情報発信の役割をM氏に移行できないまま中山間ふるさと保全委員会からの補助金(年30万円)の期限が終わった。会費がないため、予算がなく、H氏が担当を外れたこともあり、活動は休止状態になった。都市住民にやる気はあるが、その気持ちを活かせないでいる。	A氏が中心となって、行政に依存せずに活動が続けられている。K屋地区も年間3000～5000人の人が訪れるほどの活気を取り戻している。ただ、これから中山間ふるさと保全委員会からの補助金(年間24万円)の期限が終わってからの活動が不安視されている。

てもらえるようなボランティア活動を行なうことであり、それには N 谷地区で行なわれていたゆずの植栽のような、作業の結果が目に見えやすく達成感を伴うような活動や、K 屋地区で意識して行なわれていた、地域住民と参加者の活発な交流が有効である。この際、地域住民の積極的な交流参加への努力がある程度必要であり、円滑に都市農村交流を進める上では初期段階で地域住民のモチベーションを上げていくことが重要になるだろう。

(2)の時期では、さとボラへの参加を繰り返す中で、参加者に変化が生まれる。それは特定の地域への愛着や特定の地域の住民・参加者同士でのつながりの醸成である。このような変化は一過性の満足感や達成感とは別の動機として働き、参加者はさらに継続してさとボラへの参加を繰り返すようになる。この変化を引き起こすためにも、参加者と地域住民の交流の機会を用意する必要がある。また、N 谷地区で行なわれていたような、1 回 1 回のさとボラが地元のビジョンの実現に貢献するなど、より上位のプロジェクトの一環として位置づけられることで地域への関心を誘うことも有効だと言える。

(3) 継続して同じ地域のさとボラを繰り返していく中で、さとボラだけでは物足りないという気持ちや、自主的に地域を支援したいという気持ちが生まれ始める。自主応援組織が誕生するためには、そのような気持ちの醸成を確認していきながら、行政が参加者にアプローチしていく必要がある。

(4) 自主応援組織とはあくまで市民主体のボランティア組織であり、自主応援組織を継続的に持続させるためには、ボランティアの実施主体を行政から民間に移行させることが必要である。そのために重要になることを以下に列挙する。①自主応援組織の代表となるべき人物の選定：自主応援組織の代表という重い枷を背負えるほどに強い気持ちをもった人物である必要がある。②組織の実施主体は可能な限り都市住民側にするのが良い：N 谷地区の事例で見られたように、地元住民が自主応援組

織の実施主体になると都市住民への気遣いから積極的な情報発信ができなくなる可能性がある。③会費を徴収できる仕組みの導入：自主応援組織の活動資金を確保する。④行政と市民の間での活動ノウハウの共有：都市と農村の仲介役としての機能をスムーズに行政から市民に移行させ、自主応援組織が自主性を保つことができる。以上の 4 点の重要性が本研究で示唆されている。

最後に、本研究で強調したい点は、自主応援組織の成立過程で極めて重要な要素になっていることが明らかになった、「地域住民との人間関係の醸成」や「地域への愛着の強まり」は、N 谷地区、K 屋地区だけでしか実現し得ない特殊な要素ではなく、交流の場を確保し、地元住民が交流への積極性を持ち、行政スタッフが適切に対応するなどの努力と工夫があれば、どの地域でも生みだすことのできる要素だと考えられることである。言い換えると、どの地域でも自主応援組織が設立する可能性があるということである。

注

注 1) 妹尾³⁾らは援助成果が大きいほどその援助成果をもたらしたボランティア活動をその後も継続しようと強く動機付けられるということを明らかにしている。

参考文献

- 1) 北澤 大佑 (2009)：都市農村交流を活用した農村景観の保全・形成活動に関する分析—岐阜県恵那市富田地区を事例として—, 農村計画学会誌 27(-), 185-190
- 2) 石浦 邦章・加我 宏之・下村 泰彦・増田 昇 (2005)：市民団体による里山保全活動の運営形態の発展プロセスに関する研究, 日本造園学会誌 68(5), 617-622
- 3) 妹尾 香織・高木 修 (2003)：援助行動経験が援助者自身に与える効果：地域で活動するボランティアに見られる援助成果, 社会心理学研究 18(2), 106-118

Summary: To show a formation process of continuing support system for Intermediate and Mountainous Area by the city dwellers, this study focuses on the volunteer activity, "Furusato Volunteer", initiated by Kyoto Prefecture. Interview and questionnaire survey were employed. The process was separated into three stages. In the first stage, participants join the volunteer because of satisfaction of the activity. In the second stage, they join the activity largely because of human relationships in the area. In the third stage, the relationship makes them feel that they want to support the area more often and they make a volunteer organization by themselves.

キーワード (Keywords) : ボランティア (volunteer) 中山間地域 (Intermediate and Mountainous Area), 自主応援組織 (volunteer organization by city dwellers), 形成過程 (formation process) 主体間関係 (relationship among actor)

(2012 年 5 月 20 日 受付)

(2012 年 9 月 16 日 受理)